福岡市埋蔵文化財調査報告書　第465集

立花寺　3

——第3次調査報告——

1996

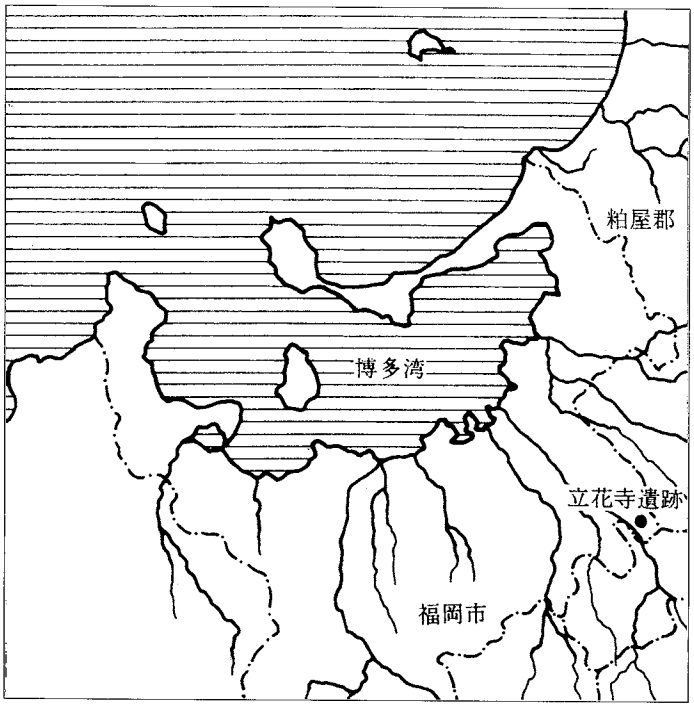
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第465集

りゅう　げ　じ

立花寺 3

――第3次調査報告――



遺跡略号　RGG－3
遺跡調査番号　9357

1996

福岡市教育委員会

序

福岡市の東に位置する月隈丘陵では、これまでに国史跡金隈遺跡をはじめとする弥生時代を中心とした重要な遺跡が発見され、調査されてきました。

本書は、その月隈丘陵の裾部に位置する立花寺遺跡群の第３次調査について報告するものです。調査では、掘立柱建物を主とした多くの遺構を検出し、弥生時代から中世にかかる遺物が数多く出土しました。調査は、遺跡のごく一部についてのものでありましたが、一帯に拡がる遺跡の内容の一端を垣間見ることができるものでした。本書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となり、研究資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたって快くご協力を賜った杉谷清氏および、工事関係者各位に深甚なる謝意を表します。

平成８年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が平成６（1994）年１月25日から同年３月25日まで発掘調査を実施した、個人住宅建設に伴う立花寺遺跡群の第３次調査の報告書である。
2．遺構の呼称は記号化し竪穴住居をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、溝をＳＤ、柱穴をＳＰ、用途不明遺構をＳＸとした。
3．本書に使用した遺構図、遺物実測図は加藤隆也が作成し、製図は平野、加藤が行った。遺構写真、遺物写真は加藤が撮影した。
4．本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。また、遺構レベルは月隈小学校(L＝18.683m)から移動した。
5．立花寺遺跡群第３次調査に係るすべての遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開される予定である。
6．本書の執筆編集は加藤が行った。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と既存の調査 …… 2
　1．立花寺遺跡の位置 …… 2
　2．遺跡の既存の調査 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．調査の概要 …… 5
　2．第１面の調査 …… 8
　3．第２面の調査 …… 8
　4．土層観察トレンチ …… 12
　5．小　結 …… 12

挿　図　目　次

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡(１/50,000) …… 3
Fig. 2　立花寺遺跡群調査地点位置図(１/2,000) …… 4
Fig. 3　第３次調査地点遺構配置図(１/1,000) …… 5
Fig. 4　検出遺構配置図(１/200) …… 6
Fig. 5　SC－01、SB－01実測図(1/40) …… 7
Fig. 6　SK－21実測図(1/40、1/3) …… 9
Fig. 7　SE－01、SD－02出土遺物(1/3) …… 9
Fig. 8　SK－12出土遺物(1/3、1/4) …… 9
Fig. 9　溝断ち割り土層断面図 (1/60) …… 10
Fig. 10　包含層出土遺物(1/3) …… 11
Fig. 11　溝出土遺物(1/3、1/4) …… 11
Fig. 12　土層観察トレンチ土層断面図(1/60) …… 12

図　版　目　次

PL. 1　(１)第１面調査区全景（南東から）　(２)第２面調査区全景（南東から）
PL. 2　(１)拡張区第１面全景（北東から）　(２)拡張区第２面全景（北東から）
PL. 3　(１)SC－01完掘状況（北西から）　(２)SK－12遺物出土状況（南東から）
PL. 4　出土遺物

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

杉谷清氏から本市に対して博多区大字立花寺字上の園694-5,694-3,694-4における個人住宅の建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの立花寺遺跡群の北側に位置し、申請地の南東側約230ｍには第２次調査地点が位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1993年12月14日に試掘調査を実施した。現況は畑地で、調査の結果、表土下約60cmで遺構が確認された。調査は1994年１月24日から同年３月25日まで行われた。

2．調査の組織

調査委託	杉谷清					
調査主体	福岡市教育委員会　教育長		尾花剛			
調査総括	文化財部長		後藤直			
	埋蔵文化財課長		折尾学（調査年度）		荒巻輝勝（整理年度）	
	埋蔵文化財課第２係長		山崎純男（調査年度）		山口譲治（整理年度）	
調査庶務	埋蔵文化財課第１係		中山昭則（調査年度）		内野保基（調査年度）	
調査担当	埋蔵文化財課第２係		加藤隆也			
試掘調査	菅波正人					
調査作業	池田省三	大谷政道	越智信孝	楠林司郎	羽岡正春	平井武夫
	山口熊孟	有田恵子	加集和子	澄川アキヨ	寺嶋道子	中村フミ子
	福場真由美	藤野トシ子	北条こず江	山本良子	平野徳子	吉田米男
	吉田隆	西本弘	吉田恭子			
整理作業	加集和子	平野徳子	山本良子			

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の杉谷清氏をはじめとするみなさまには多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

遺跡調査番号	9357		**遺跡略号**	ＲＧＧ－３	
調査地地籍	博多区大字立花寺字上の園694-5,694-3,694-4			**分布地図番号**	11－Ａ－２
開発面積	711.71㎡	**調査対象面積**	711.71㎡	**調査面積**	241.7㎡
調査期間	1994年１月24日～1994年３月25日				

Ⅱ．　遺跡の位置と既存の調査

1．立花寺遺跡の位置

福岡平野の東部には多々良川流域に粕屋平野が広がり、その西には、福岡平野との分水をなす月隈丘陵が西王寺山から北西方向に低くなりながら延びている。その月隈丘陵は標高100～200ｍの丘陵で、その西斜面の裾部に立花寺（りゅうげじ）遺跡群が位置する。丘陵斜面は解析作用が著しく、丘陵頂部が独立丘状に残されているが、ごく低い鞍部によってつながっている地形が顕著である。

遺跡群周辺のこのような地形には弥生時代の墓地が形成される例があり、過去に調査されたものとして、下月隈Ｂ（下月隈宮ノ後）遺跡、天神森（下月隈天神森）遺跡、上月隈遺跡などを挙げることができる。また、立花寺遺跡群の南に面した丘陵頂部には金隈遺跡が所在する。古墳時代にいたると福岡市文化財地図に記されているように丘陵頂部は古墳の築造に利用されている。

いっぽう、斜面あるいは丘陵裾の低地部分の遺跡については、その調査が丘陵の北端近く、席田遺跡群に偏っておこなわれており、弥生時代の中期から後期にかけての竪穴住居を確認している。

以上のように、立花寺遺跡群はその範囲を、独立丘陵とその周囲の緩斜面に推定されている。一帯は開析がすすみ独立丘が幾つか形成されている。それらの間はごく低い鞍部を残すが、谷部により隔てられている。谷部は砂礫により埋積されて扇状地状をなし、谷出口の沖積地に向かって緩い傾斜をもって続いている。今回報告する調査は浅い谷部に立地する遺跡についての調査である。

2．遺跡の既存の調査

立花寺遺跡群において現在まで４次の発掘調査が行われている。

第１次調査

市道新設に先立つ記録保存のための発掘調査である。1988年４月から同年６月までの調査で254㎡を調査した。流路あるいは溝から縄紋時代から中世に至る遺物が出土しており、遺跡群の時期と形成過程を知る上で重要な調査となった。

第２次調査

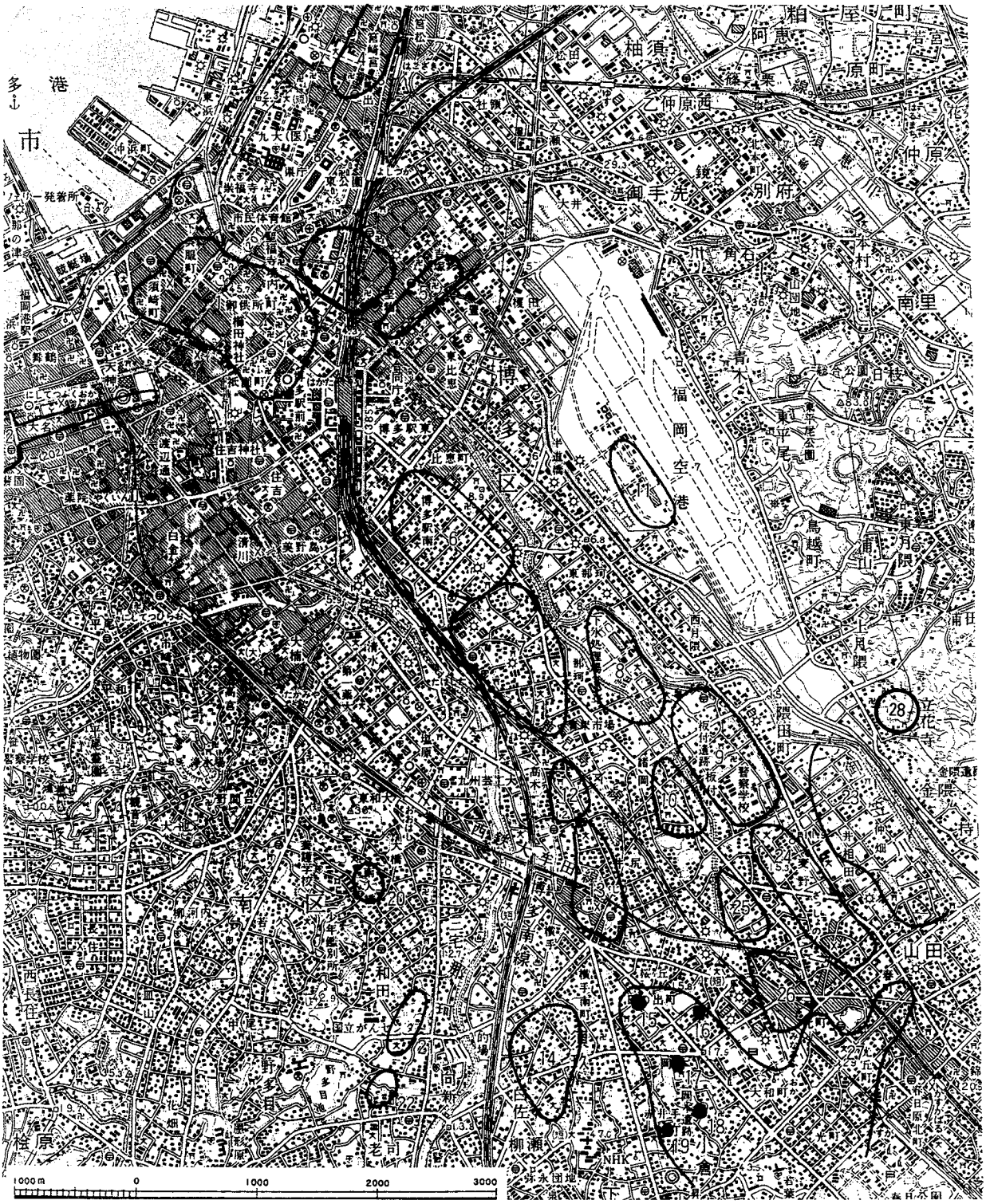
民間の開発事業に先立って、記録保存のために実施した発掘調査である。1990年９月から同年12月の調査で1,002㎡を調査した。弥生時代の遺物、古墳時代の竪穴住居が確認されたほかに、古代において丘陵の裾部と崖の狭長な緩傾斜地を整地し、建物を重層的に建築した遺構が確認された。

第３次調査

個人住宅の建設に先立って、記録保存のために実施した発掘調査であり、今回報告するものである。調査地は神社境内と西側の丘陵との間に位置し、南側から緩い傾斜をもっており、谷部もしくは谷の出口にあたることは地形から顕著であった。現在、月隈丘陵は宅地化が進んでおり、丘陵が削られ、谷が埋められており、旧地形が不明瞭になってきている。

第４次調査

市道新設に先立って、記録保存のために実施した発掘調査である。1994年９月から同年11月の調査で590㎡を発掘調査した。丘陵の斜面から谷部にかかる調査で古墳時代から古代にかけての遺構、遺物が確認されている。



1．博多遺跡群
2．福岡城
3．堅粕遺跡群
4．箱崎遺跡群
5．吉塚遺跡群
6．比恵遺跡群
7．那珂遺跡群
8．那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9．板付遺跡
10．諸岡遺跡
11．雀居遺跡
12．五十川高木遺跡
13．井尻遺跡群
14．曰佐遺跡群
15．須玖唐梨遺跡
16．須玖永田遺跡
17．須玖岡本遺跡
18．須玖四丁目遺跡
19．赤井手遺跡
20．三宅廃寺
21．野多目遺跡
22．野多目拮渡遺跡
23．井相田遺跡群
24．麦野遺跡群
25．三筑生産遺跡
26．南八幡遺跡群
27．雑餉隈遺跡群
28．立花寺遺跡群

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡(1/50,000)

Fig. 2　立花寺遺跡群調査地点位置図(1/2,000)

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

1994年1月24日に発掘機材を搬入、翌日よりバックホーによる表土除去を行った。まず北側低所からバックホーを調査区内に進入させるにあたり、表土が薄い場合、遺構面を乱す可能性が予想されたため、一部表土の剝ぎ取りを行った。その結果、断面に遺物包含層は見られず、地表面下約30cmで柱穴等が確認された。よって部分的ではあるが先行して図面を作成し、バックホーは南側から剝ぎ取りを開始した。

調査区内は、まず建物の建設部分のみを除去した。表土は深いところで60cmを測り、遺物包含層の上面にて、遺構検出を行い、第1面とした。調査終了後、ベースとなる黄褐色砂質土層の上面に20cm～30cm堆積する黒褐色遺物包含層をバックホーにて掘削し、第2面として遺構を検出、調査することとした。

その後、遺構の広がりと地形の関係をつかむため、調査区を埋め戻し、西側に新しく拡張区を設定して調査を行った。建物部分の調査と同様に表土をバックホーにて除去し、第1面の調査を行い、第2面までは人力にて掘削し、調査した。

その結果、竪穴住居、土坑、柱穴等谷側以上の遺構の密度が確認されたため、西の丘陵側に土層観察のためのトレンチを設定し掘削を行い包含層の広がりを確認してすべての調査を終了した。

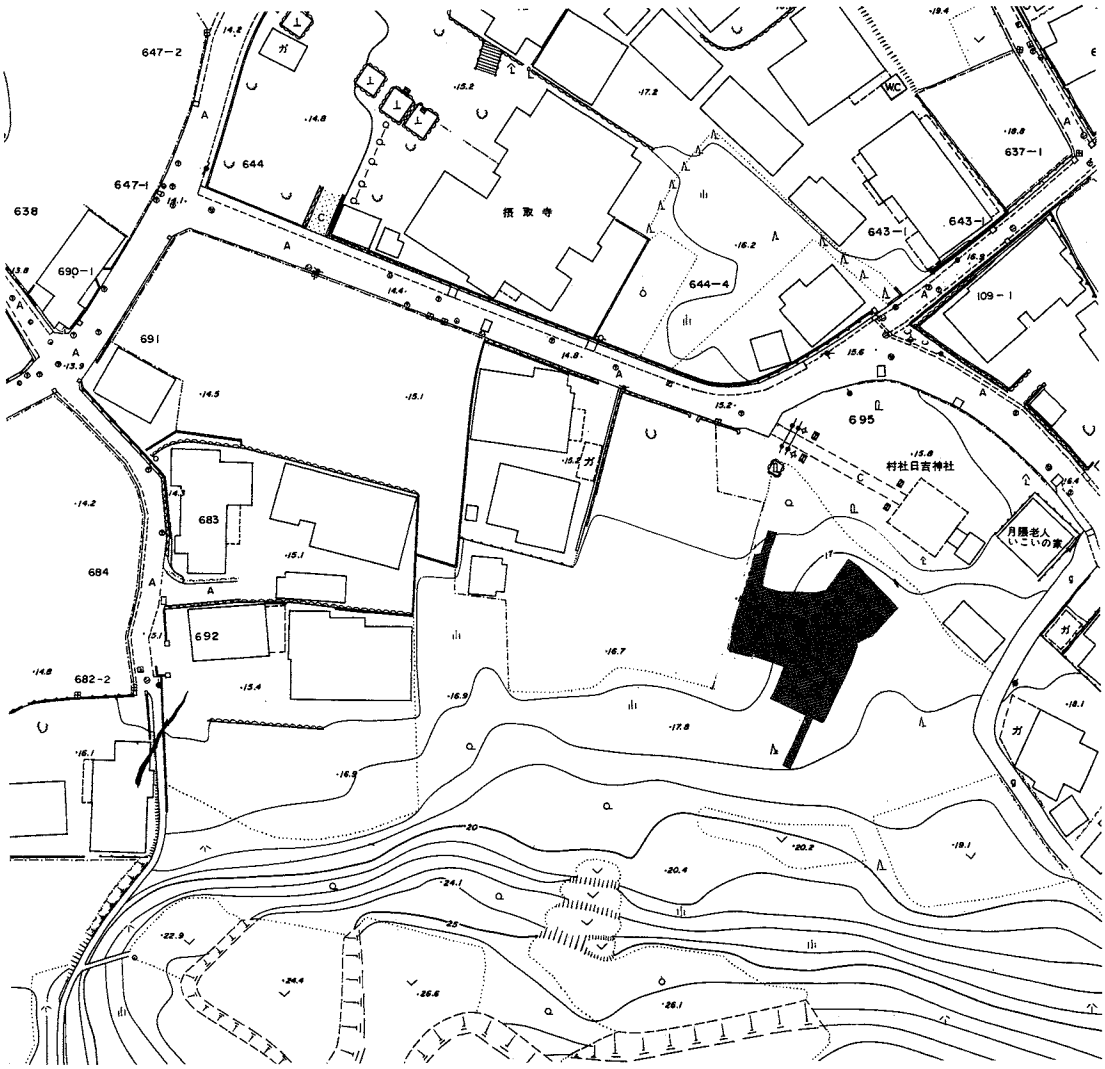


Fig. 3　第3次調査地点遺構配置図(1/1,000)

Fig. 4　検出遺構配置図(1/200)

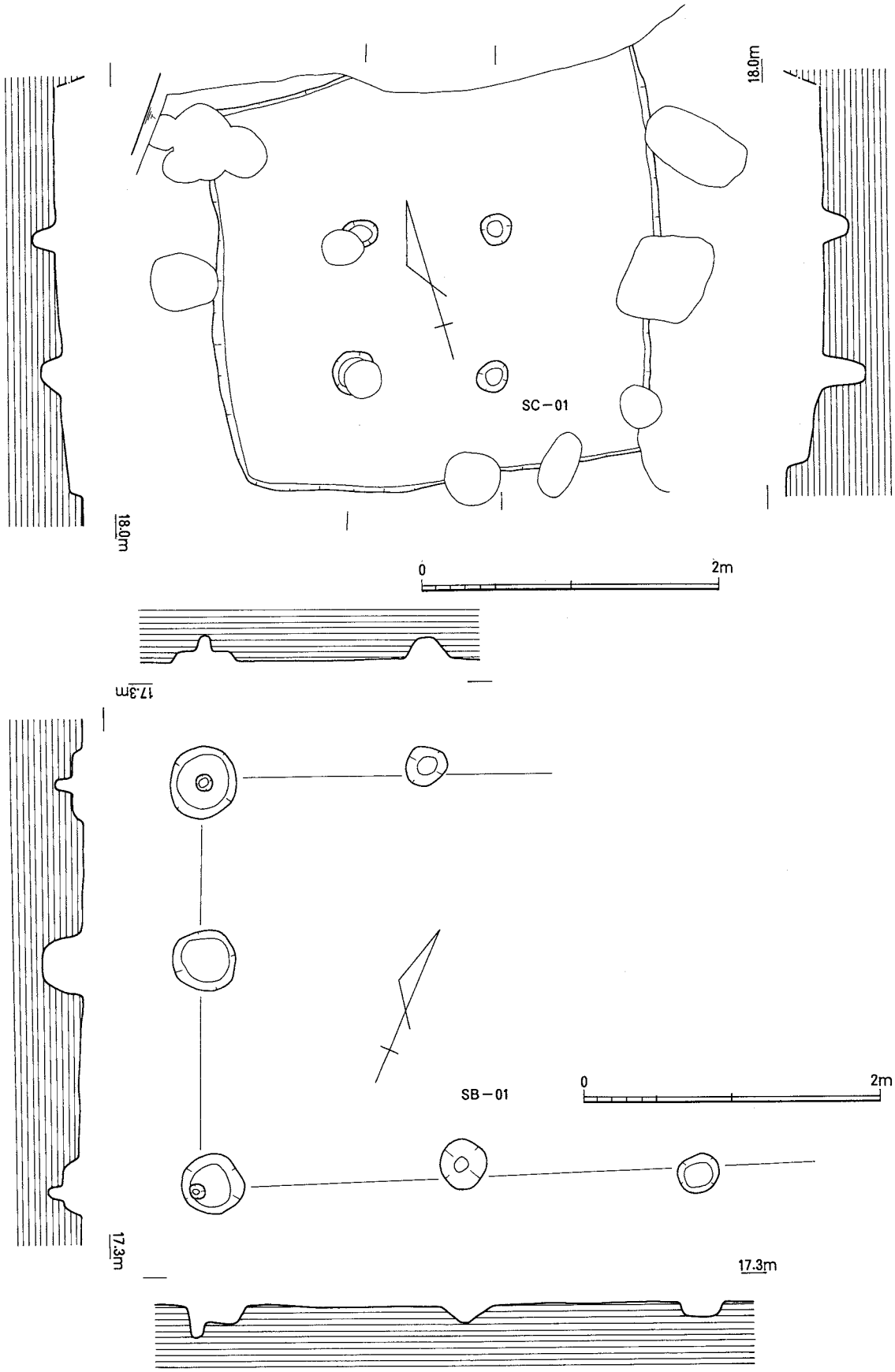


Fig. 5　SC－01・SB－01実測図(1/40)

第１面では、竪穴住居、溜井状遺構、土坑、溝、柱穴が確認された。第２面においては、土坑、柱穴、溝状遺構などを調査した。

今回の報告は調査の手順に従わず、各面ごとの記録に従って記述する。

２．第１面の調査

第１面とした調査面は黒褐色遺物包含層の上面にあたり、標高約17.3ｍを測る。検出された遺構は古墳時代の竪穴住居、古代の溜井状遺構、中世の土坑、柱穴などである。

竪穴住居（SC）

SC―01（Fig.５，PL.３）

拡張区の東側において確認された。方形のプランをもち南北2.8ｍ、東西3.1ｍ、深さ22cmを測る。上面から多くの柱穴に切られ残存は良くないが、４本の主柱穴が確認された。上面からの掘り込みによる切り合いが多く良好な遺物は見られなかった。

土坑（SK）

SK―21（Fig.６）

拡張区西側にて検出された不定形を呈する土坑である。長辺２ｍ、深さは15cmを測る。覆土は上層が黄灰色砂質土と黒褐色土ブロック混じり土層で下層は青灰色砂質土層である。

出土遺物

出土遺物は少ない。１は白磁碗である。底径4.8cmを測り、内面に目跡が残る。遺物から15世紀以降に位置づけられる。

溜井状遺構（SE）

SE―01

調査区の北側にて確認された。すり鉢状の遺構に断面Ｕ字の溝が付設するもので、すり鉢形の直径は2.5ｍを測り、溝の幅は1.1ｍを測る。

出土遺物（Fig.７，PL.４）

２は須恵器の坏である。口径10.8cm、底径7.0cm、器高2.3cmを測る。３は擂鉢である。口径23.2cm、底径12.0cm、器高11.0cmを測る。４は須恵器高坏である。口径10.6cmを測る。坏部の底は平たく、鋭く立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。５は須恵器坏身である。口径15.2cmを測る。遺構の時期は遺物から９世紀代に位置づけられる。

土坑

SK―１２（PL.３）

調査区の東側、第１面において検出された。不定形の浅い土坑である。

出土遺物（Fig.８，PL.４）

６・７は土師器の甑である。６は口径11.2cmを測る。７は口径29.0cmを測る。８は土師器高坏である。口径8.3cm、底径7.8cm、器高10.1cmを測る。磨滅が著しく、器面調整は不明である。９・10は須恵器坏蓋である。９は口径13.7cm、底径7.6cm、器高3.9cmを測る。10は口径13.6cm、器高3.6cmを測る。口縁内側に段をもつ。11・12は須恵器坏身である。11は口径13.8cm、器高4.2cmを測る。12は口径15.1cm、器高4.2cmを測る。

３．第２面の調査

遺物包含層

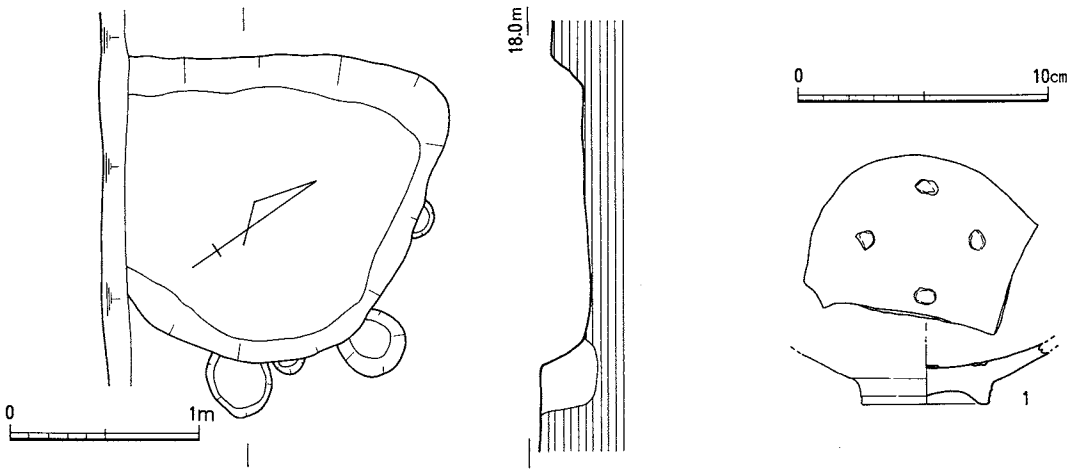


Fig. 6　SK－21実測図(1/40、1/3)

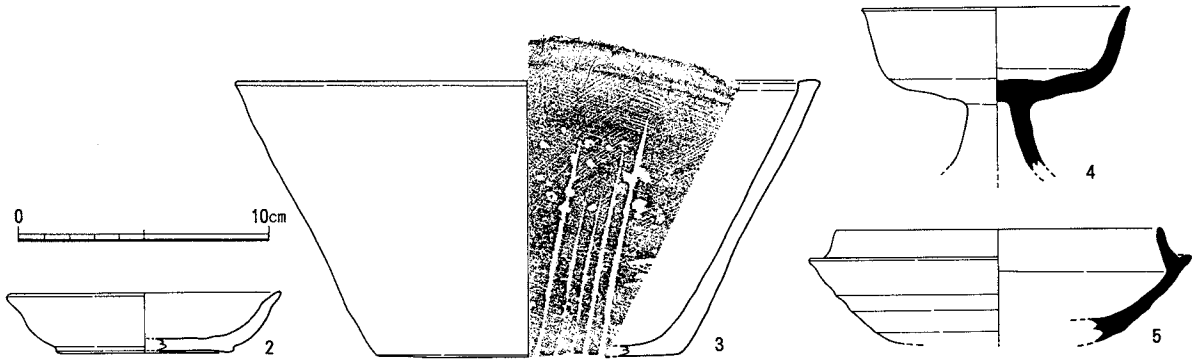


Fig. 7　SE－01・SD－02出土遺物(1/3)

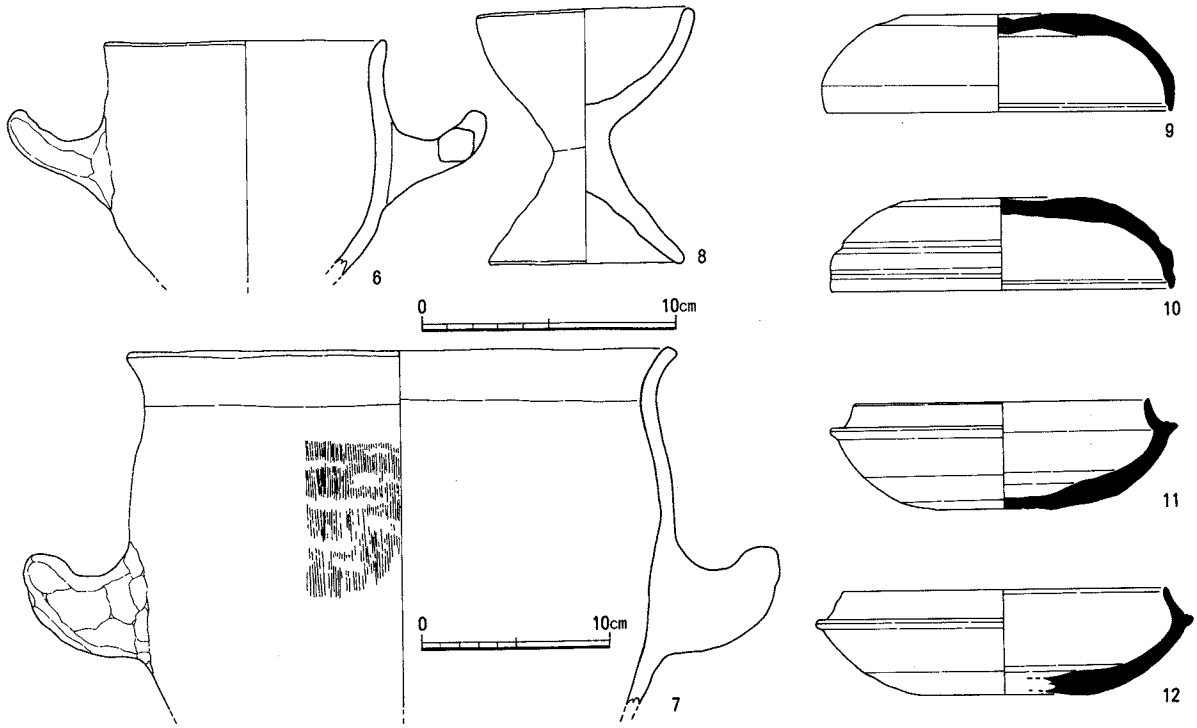


Fig. 8　SK－12出土遺物(1/3、1/4)

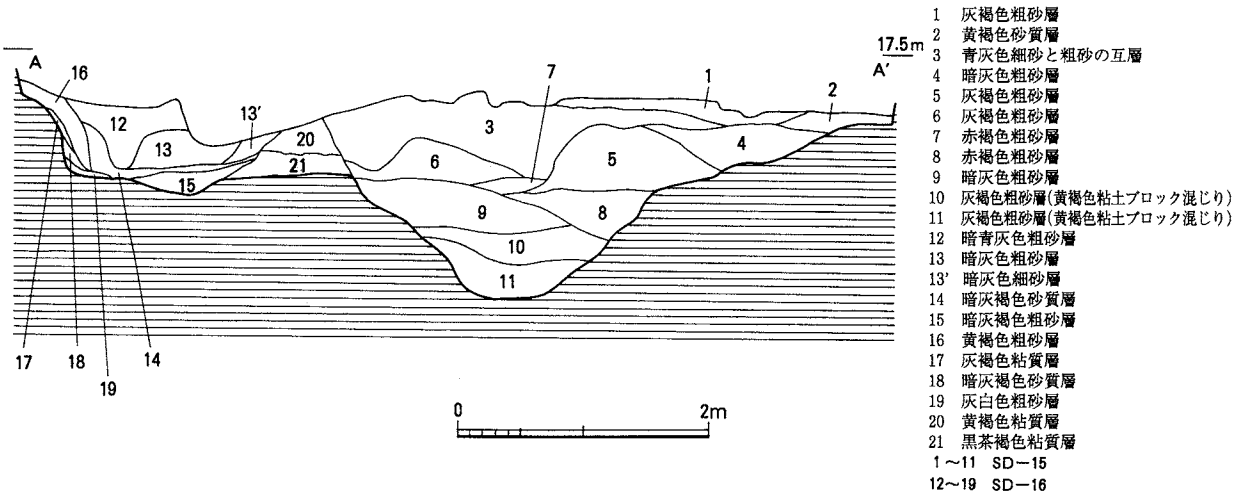


Fig. 9　溝断ち割り土層断面図(1/60)

弥生土器も整理箱1箱程度出土している。抉り入柱状片刃石斧が出土しているが縄紋晩期から弥生前期の土器は確認されていない。

包含層内遺物（Fig.10, PL. 4）

13は須恵器壺である。口径12.2cmを測り、口縁下に2条の沈線が巡る。14～16は須恵器坏蓋である。14は口径14.2cm、器高3.9cmを測る。15は口径14.4cm、器高4.3cmを測る。16は口径14.4cm、器高4.1cmを測る。17～19は須恵器坏身である。17は口径13.2cm、器高4.0cmを測る。18は口径14.6cm、器高4.7cmを測る。19は口径15.4cm、器高4.2cmを測る。20は土師器壺である。口径9.6cm、器高8.9cmを測る。21は抉り入柱状片刃石斧である残存長8.6cm、最大幅2.7cmを測る。図化していないが他にも弥生時代の遺物が出土している。

掘立柱建物（SB）

今回の調査において、第1面では250個を越える柱穴が確認され、190個から遺物が確認された。第2面からは140個を越える柱穴が確認され、内33個から遺物が確認された。

第2面において、埋土が黒褐色を呈する柱穴も相当数あり、第1面において確認されなかった柱穴もあると思われる。よって第2面検出のすべての柱穴が遺物包含層の堆積以前のものであるとは断定できない。

ここでは、建物として可能性の高い1軒についてのみ記述する。

SB－01（Fig. 5）

調査区の北東部において検出された2間×2間以上の建物で遺構の北東部は調査区外にのびる。柱間は1.2～1.8mを測り、N－65°－Eをとる。

溝（SD）

SD－11

第2面にて検出された。幅1.2～1.8mを測り、蛇行して西側低地に向かう。

出土遺物（Fig.11）

22は弥生土器の壺である。胴部は丸く、口縁は水平にひらく。口径12.0cm、口縁内側から外面にかけて丹が塗られている。

SD－15（Fig. 9）

第2面調査後断ち割りにて検出された。調査期間の関係から完掘していない。

出土遺物（Fig.11、PL. 4）

23は高坏の坏部である。24は壺の底部である。底径7.2cmを測る。25は甕の底部である。底径6.6

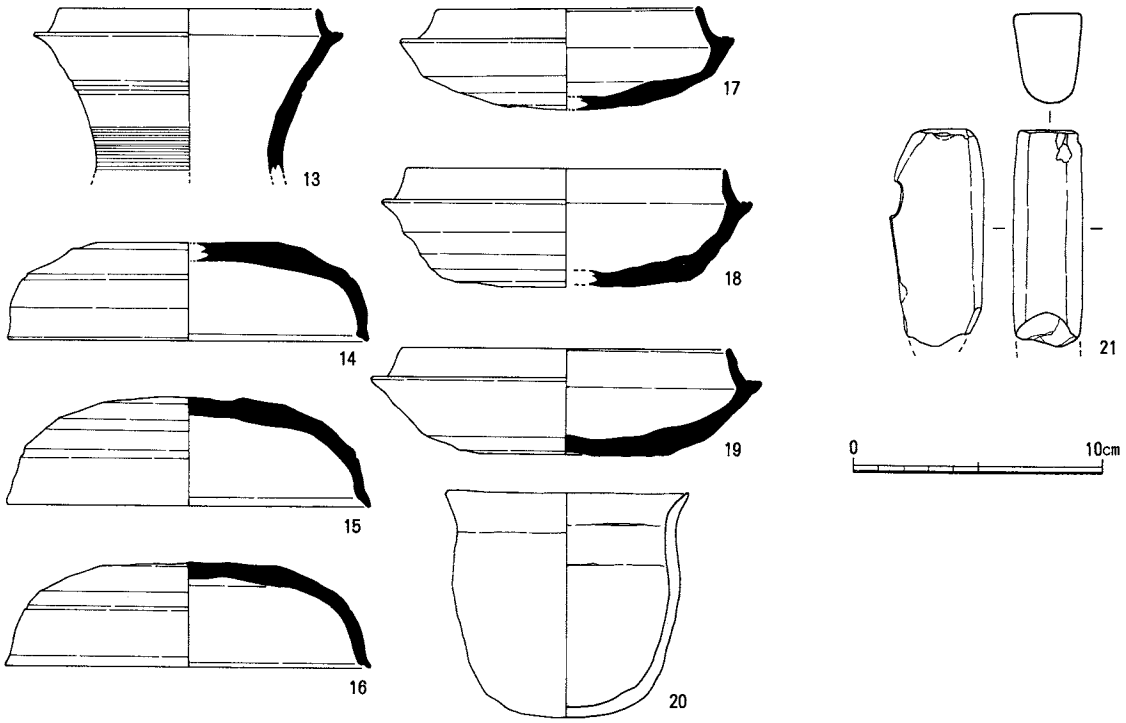


Fig.10　包含層出土遺物(1/3)

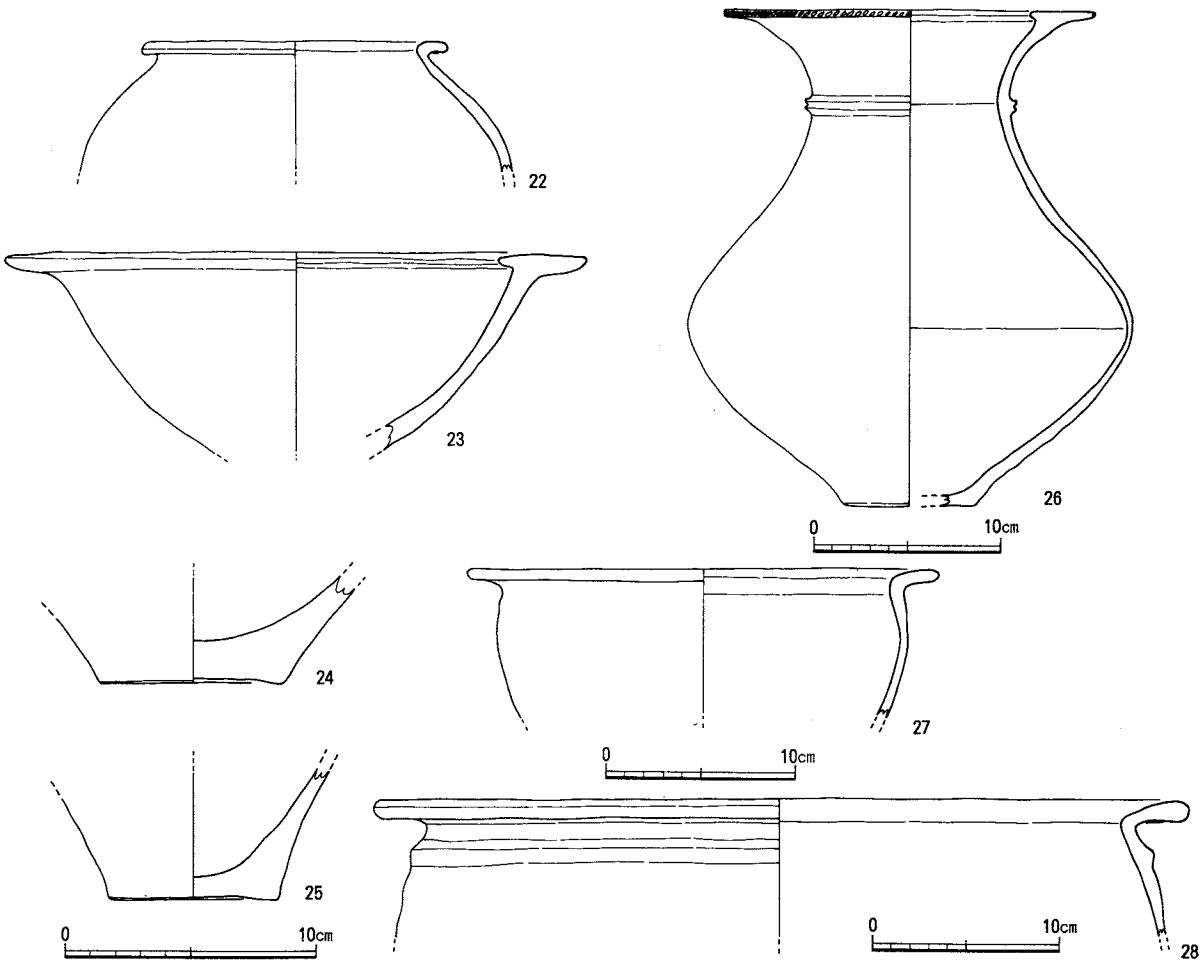


Fig.11　溝出土遺物(1/3、1/4)

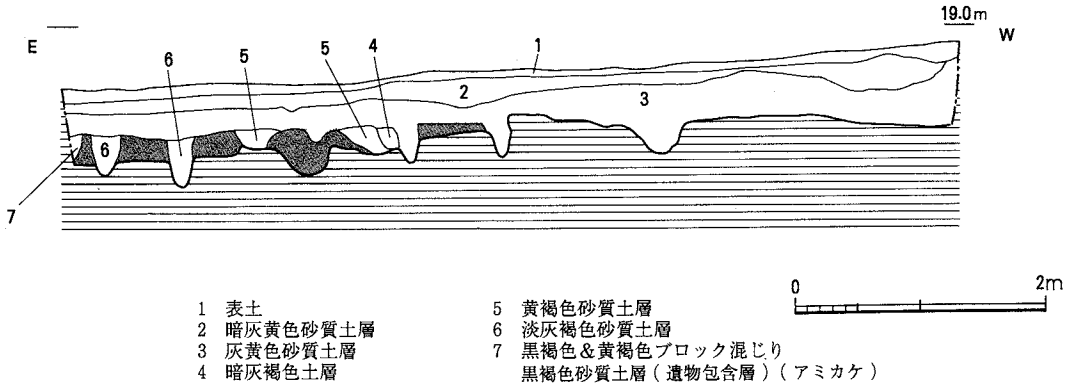


Fig.12　土層観察トレンチ土層断面図(1/60)

cmを測る。26は壺である。底部は平底で、最大径は胴部の中央より下位にあり、口縁は水平にひらく。口縁端部にキザミ目を施す。口径19.6cm、底径7.2cm、器高26.4cmを測る。遺物から埋没時期は弥生時代中期に位置づけられる。

SD—16（Fig. 9）

第2面調査後断ち割りにて検出された。SD－15同様、調査期間の関係から完掘していない。

出土遺物（Fig.11）

27は甕である。最大径は胴部の上位にあり、口縁は水平にひらく。口径25.0cmを測り、器面は磨滅している。28は甕である。口縁下に三角凸帯をつけ、口縁は大きく外反する。口径43.4cmを測る。磨滅が著しく器面調整は不明である。遺物から遺構の埋没時期は弥生時代中期に位置づけられる。

4．土層観察トレンチ（Fig.12）

拡張区の調査から、丘陵側によっても遺物包含層の堆積が良好であることと、黄茶褐色シルトの地山のレベルが上がらないことが確認された。この2点を確認するために丘陵側に土層確認の長さ約7ｍのトレンチを設定し掘削を行った。

その結果、7ｍのトレンチの中で地山は30cm標高を上げ、トレンチ東端から約4ｍで包含層が途切れることが確認された。丘陵側では地山上に遺構が見られないことと汚れが見られないことから、黒褐色遺物包含層の上層にあたる灰黄色砂質土層が堆積する以前に、丘陵からの斜面を削り込んだことが考えられる。

5．小　結

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺物が出土し、遺構としては溝、古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、古代の溜井状遺構、中世の土坑が調査された。

南東方向に230ｍ離れた第2次調査では、弥生前期末から中期前半にかけての遺物が出土しているが、今回の調査では、中期以降の遺物が大半を占めており、様相を異にする。また、古代以降においても、豪族居館、筵田駅に関連するような遺構・遺物は確認されておらず、地勢的制約があった可能性が高い。

しかし、丘陵間の谷部にまで人々の生活圏は及んでおり、水の流れがかわったか、意図的にかえて埋没した後は人々の居住圏として現在に至っている。このような人間の活動と谷状を呈する地形の克服から遺跡群が形成・拡大されていくようである。そのような意味でも今回の調査は重要な資料を提供した。

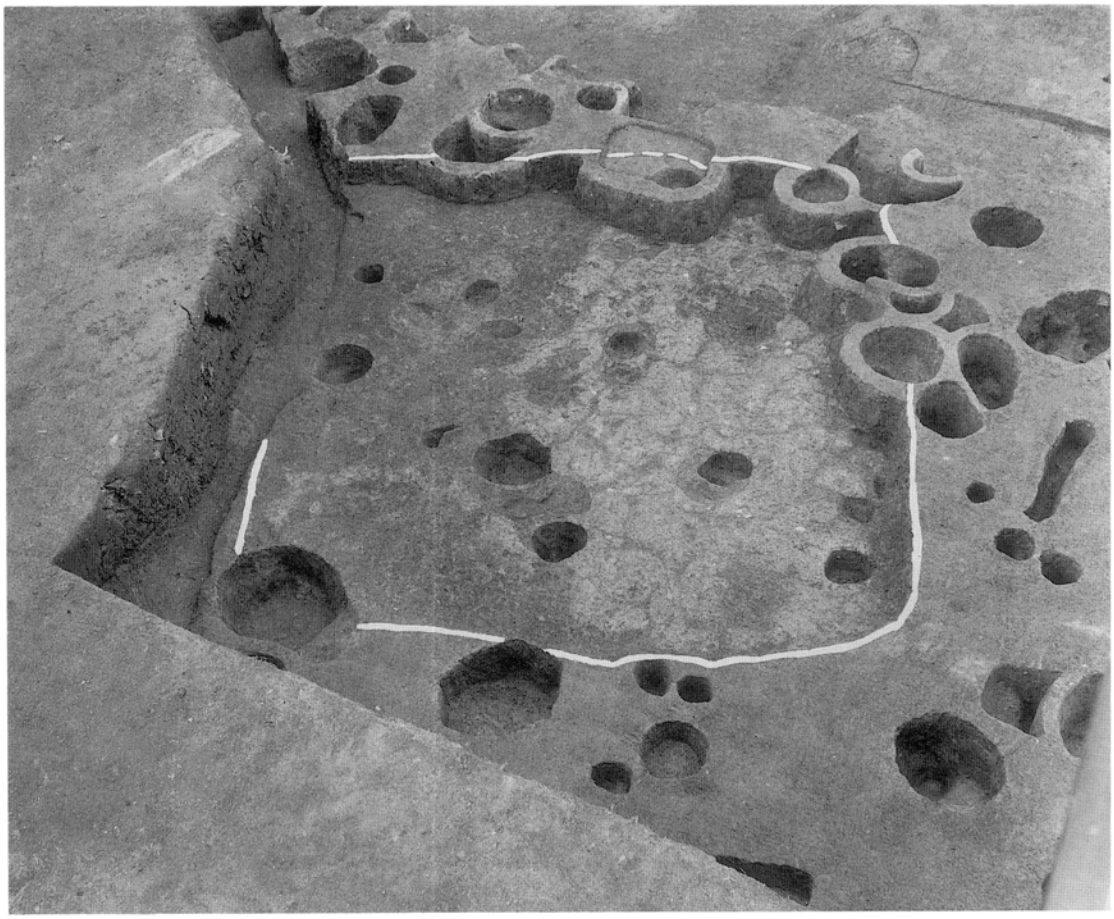
図　　版

(1)第１面調査区全景　（南東から）

(2)第２面調査区全景　（南東から）

(1)拡張区第１面全景　(北東から)

(2)拡張区第２面全景　(北東から)

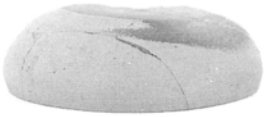


(1)SC－01完掘状況　(北西から)

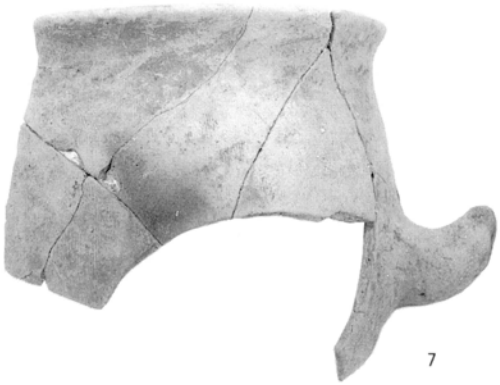
(2)SK－12遺物出土状況　(南東から)

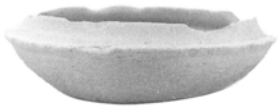
3

8


9

10


7

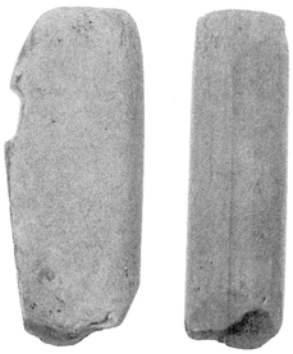

11

3　　SE－08
7～11　SK－12
13～21　遺物包含層
26　　SD－15

13

15

16


21

17

19

26

出土遺物

立花寺　3

――第3次調査報告――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第465集

1996（平成8）年3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
☎（092）711－4667

印　刷　栄光印刷株式会社
福岡市東区松田一丁目9－30
☎（092）611－3838

立花寺 3

第3次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第465集

1996 福岡市教育委員会